

「日本語ディベート演習」指導法覚書

● 土 屋 博 映

1、はじめに

本科目の共通理解として、「授業の目的・目標」には次のように記されている。

古代ギリシャ・ローマ時代のレトリック（弁論による説得性）から続く論理的な思考力・表現力・行動力は、現在欧米におけるディベートという形で引き継がれています。それは、単なる実践的な言語活用の技術（議論、論争など）だけでなく、認識・思考・判断までも巻き込む、言語のおよび非言語的な総合的な表現の領域なのです。

日本語ディベート演習は、そのような能力と可能性を高めるためのものです。ディベート本来の意味から、一方的な見方、考え方、捉え方にならない為に、複数の視点からの取り組みが必要不可欠で、そこに本質的な核心への道が見出されるのであり、より具体的には、あるテーマについて、論点を見極め、賛成と反対の立場（または、異なる立場）からその正当性・妥当性を明らかにし、それに基づいて論議し、その過程で（時には立場を変えながら）何が核心なのかを把握するような訓練が必要になってきます。

授業では、決められたテーマについて、学生一人ひとりが賛成あるいは反対のいずれかの立場から、他の人たちを説得する為に必要な手続きを準備し、それを実際に論争という形で展開していくことになります。気を付けてほしいことは、論争の為の論争や勝ち負けだけに陥るのではなく、見方・考え方・捉え方を論理的で、客観的なものにする事です。

※ ゴシック部分、土屋による

これにより、ディベートは、単なる、論議で勝ち負けをあらそうことが目的ではなく、「認識・思考・判断までも巻き込む」「総合的な表現の領域」であり、本科目は「そのような能力と可能性を高めるためのもの」であり、それには「一方的な見方、考え方、捉え方にならない為に、複数の視点からの取り組みが必要不可欠」であり、最終目標は「見方・考え方・捉え方を論理的で、客観的なものにする事」にある、ということがわかる。

2、シラバス

以下、シラバスを掲げる。

授業題目	ディベートに強くなろう
授業の目的・目標	※1において既に記した
授業の概要	ディベートとはどういうものかの理解が第一目標。理解をふまえて、身近なテーマから次第に社会的なテーマまで、ディベートを演習形式で学んでいく。毎回チームごと

	に対戦し、ディベートを実践する。ディベート終了後は、全員が、予習と復習と反省のために必ずレポートを作成し、提出し、ディベートの修得をより確実なものとする。
自習に関する一般的な指示	各回のテーマと担当者は事前に決めておくので、自分の該当授業の役割を十分に把握し、自分のテーマへの考えをよくまとめておくこと。
授業スケジュール	1回 ディベート入門（1） 2回 ディベート入門（2） 3回 演習（1）大学 4回 演習（2）講義 5回 演習（3）入学式（卒業式） 6回 演習（4）学園祭 7回 演習（5）マナー 8回 演習（6）結婚 9回 演習（7）少子化 10回 演習（8）若者 11回 演習（9）教育 12回 演習（10）社会 13回 演習（11）政治 14回 ディベートまとめ 15回 課題小論文
授業の運営方法	演習主体であるが、理解も重視するので、演習をはさみ軽い講義も交える予定である。またディベートは、とくに発言を積極的にさせる。討論の当事者はもちろん、判定する側の学生たちにも大いに発言をするようにさせる。また、講師との質疑応答にも能動的に参加させ、コミュニケーション能力を高めるようにさせていく。
評価方法	出欠状況、受講態度、演習内容、毎回提出のレポート、ノートの整理、テキストの用意、小論文の成績、以上を総合的に評価する。期末試験だけの評価はしない。
テキスト	『頭を鍛えるディベート入門』／松本茂／講談社／1996年／860円（税別） 4-273-00747-9
参考文献	授業の中で指示する。
関連ページ	
その他、受講生への注意事項	欠席は少なく、遅刻・私語厳禁、ディベートに強くなろうという積極的な姿勢で参加すること。その上で、レポートをしっかり書き、毎回成長するように努力しよう。

1において、「目的・目標」については述べた。

「題目」は、「ディベートに強くなろう」とした。正直言ってあまりよい題目が浮かばなかったのて穏便なものにしたというところだ。

「概要」は、「ディベートの理解」を第一目標とした。テーマは身近なものから社会的なものまで広げ、チームを作り、実践することとした。さらに毎回、該当テーマに対し、授業開始直後と終了直前にレポートを課すこととし、ディベートに対する意識を高めるようにした。

「指示」は、次回のテーマは記されているので、あらかじめ考えをまとめておくようにとした。

「スケジュール」については、1、2回が入門編で、テキストをもとにディベートの基礎を把

握させ、3回～13回が演習、14回がまとめ、15回は課題小論文とした。

「運営方法」は、「概要」と重なる部分が多い。「発言は積極的」「質疑応答に能動的に参加」させることとし、積極性を重視した。

「評価方法」は、15回の授業全体を総合評価するという姿勢である。演習重視はもちろんだが、定期試験にのみ重きをおかず普段の出席・レポートも評価するようにした。こうして授業への積極的な参加を促してみることにした。

「テキスト」は松本茂氏の『頭を鍛えるディベート入門』（講談社）とした。値段も手ごろで、コンパクトで、ポイントが簡潔明瞭にまとめられていて、いろいろな意味で学生に、やさしい・うれしい、テキストであることを考慮した。

「注意事項」では、さらに「積極的な姿勢」を強調した。

3、講義（テキスト）

本科目は演習であるが、入門編2回分は講義中心で、かつ演習開始後も授業の最初に軽く講義をいれることとした。ディベートの本質を常に意識させるためである。

使用テキストは前述のごとく『頭を鍛えるディベート入門』（講談社・松本茂）である。

テキストは、次のように、第1章から第5章プラス付録という構成となっている。

- 第1章 ディベートとは何か
- 第2章 なぜディベートは必要か
- 第3章 論理的な話し方とは
- 第4章 ディベートの進行形式
- 第5章 英語の力を伸ばすディベート
- 付録 競技ディベートの実際

ただし、半期の授業で演習をしながら、すべて解説するのは不可能なので、主に第1章を中心に、ディベートを理解させるようにしている。

とくに第1章では、「●ディベートと説得」「●ディベートと発想教育」に重きをおいている。また実際にディベートを行う上で役立つものとして「●ディベーターの特徴と役割」「●審査員はよい聞き手」「●審査員の役割と任務」があげられる。

テキストの存在はディベートの基本を忘れないための必需品といえる。

4、演習

さて、入門での解説・理解の段階を経て、いよいよ本番のディベート演習となる。チームを作るのだが、このチーム作りに工夫がいった。

まず、配布資料を掲げる

★配布資料1（4月12日配布）

◎組・班

A組（黒板に向かって左側に学籍簿順に座る。番号は学生の整理番号）

1班 1 2 3 2班 4 5 6 3班 7 8 9
4班 10 11 12 5班 13 14 15 6班 16 17

B組（黒板に向かって右側に学籍簿順に座る）

1班 18 19 20 2班 21 22 23 3班 24 25 26
4班 27 28 29 5班 30 31 32 6班 33 34

※ A・B組を1班～6班に分担する

◎スケジュール

- 1回 (4月12日) ディベート入門
- 2回 (4月19日) ディベート入門
- 3回 (4月26日) ☆大学は共学にすべし
- 4回 (5月10日) ☆講義は遅刻を認めるべし
- 5回 (5月17日) ☆入学式は廃止すべし
- 6回 (5月24日) ☆学園祭は廃止すべし
- 7回 (5月31日) ☆「体育」は必修とすべし
- 8回 (6月7日) ☆大学構内での喫煙は禁止すべし
- 9回 (6月14日) ☆結婚式は廃止すべし
- 10回 (6月21日) ☆優先席は健常者の使用を禁止すべし
- 11回 (6月28日) ☆義務教育は廃止すべし
- 12回 (7月5日) ☆携帯は電車の中でも自由に使用させるべし
- 13回 (7月12日) ☆選挙権は18歳からとすべし
- 14回 (7月23日) ☆夫婦は同姓にすべし
- 15回 (7月26日) ☆死刑は廃止すべし

◎授業の構成

1、命題に対する根拠(賛成派・反対派)を家で箇条書き(表賛成・裏反対・レポート用紙提出)
→授業前に提出

2、表レポート作成(ディベート前の考え)→各組の根拠に従い、書き方は自由(提出はディベート後、裏を書いてから)

※「本日の目標」を設定し、レポートの最後に簡明に記しておくこと。

3、ディベート

①賛成派がまず意見を述べる(論述)→全員メモ→②反対派が反論→(休憩)→③反対派が意見を述べる→全員メモ→④賛成派が反論→(休憩)→⑤賛成派、判定→⑥反対派、判定

4、裏レポート作成(ディベート後の判定)にまとめる(賛成・反対自由)

本日のディベートへの判定を記す(レポートは「一人ディベート」の形で記す)。

①判定(「賛成」か「反対」かのみ記す)②賛成の立場③反対の立場④結論にいたる理由(②の意見と③の意見を比較し、それによって「賛成した」(もしくは「反対した」と記す)、と論ずること。つまり4段落になる。①は漢字2字のみ、②と③が長く、④は以上を受け、簡潔に結論を記す。最後に簡潔に、「本日の目標」は果たせたか記すこと。(以上資料1)

配布資料1で、席順を決め、同時に全員をA組かB組かの班に位置づけ、授業スケジュール(各回の命題)を明確にした。次に、授業の構成を明示し、宿題、レポート作成方法(表ディベート前の考え、裏ディベート後の判定)、ディベートの形式を明確にした。これをハンドブック(ハンドペーパー)として常時携帯させるようにした。これがあれば、学生が何をどうしていいか迷うことはないと考えた。

後日、資料1の中のディベート演習とその前後のなすべき点をさらにわかりやすく、資料2として配布した。

★配布資料2（4月26日配布）

●演習のシステム

○ディベート前

☆命題に対する根拠（賛成派・反対派）を家で箇条書き（表賛成・裏反対・レポート用紙提出）

☆レポート作成（表・ディベート前の考え・姿勢）、

○ディベート

☆チーム作り（当日の出欠状況によりA組・B組より3名ずつ選抜）

①賛成派がまず意見を述べる（論述・主張）→全員メモ（30秒）→②反対派が反論→休憩・メモ（1分）→③反対派が意見を述べる（論述・主張）→全員メモ（30秒）→④賛成派が反論→休憩・メモ（1分）→⑤賛成派、判定→全員メモ（30秒）→⑥反対派、判定→休憩・メモ

●ディベート後

☆レポート用紙（裏・ディベート後の判定）にまとめる

（賛成・反対自由）

本日のディベートへの判定を記す（レポートは「一人ディベート」の形で記す）。

①判定（「賛成」か「反対」かのみ記す）

②賛成（反対）の立場③反対（賛成）の立場

※判定が「賛成」の場合→②反対③賛成

※判定が「反対」の場合→②賛成③反対

④結論にいたる理由（②の意見と③の意見を比較し、それによって「賛成した」（もしくは「反対した」と記す）、と論ずること。つまり4段落になる。①は漢字2字のみ、②と③が長く、④は以上を受け、簡潔に結論を記す。

※最後に簡潔に、「本日の目標」は果たせたか記すこと。（以上資料2）

前述のように、資料2は、資料1の中の授業の方向性をより明確にしたものである。

つまり、ディベート前と、ディベート中と、ディベート後と区分し、それぞれの段階でのなすべきことをより具体的に示したのである。

まず、ディベート前に宿題を課した。それは、あらかじめ、命題に対する、賛成（表）と反対（裏）の根拠を箇条書きにして、授業前に提出させるというもの。賛成と反対の根拠をできる限り、記させ、数の多い者をAランクとした。それにより、根拠を多角的に考える粘り強さを養うこととした。

次に、ディベート前のレポート作成の方法を明確にした。命題に対し、各自がすでに賛成派か反対派に振り分けられているので、それをもとに自由に考えを述べさせることにした。目標は、ディベート前の自分の考え（疑問点、主張等）を明確にし、ディベートの判定結果を予測することにある。この際、宿題とした根拠を、大いに活用することになる。

次に、眼目である「ディベート演習」である。演習でもっとも苦心するのが、チーム（班）作りである。チームの人員が固定できればいいのだが、演習に当たっていても無断で休むものが多い。さらに再履修の学生がいた場合、欠席する可能性も高くなる。したがって、一応のチーム（班）は作成してはみたものの、結果としてそれがそのまま活かされなくなった。

資料1に示したように、チームは3名構成である。この3名はディベートでは最低限必要な人

数と考えている。本当は4名いなくてはならないのだろうが、総人数と授業時間を考えると、3名が限度である。だが、2名ではディベートの体をなさないことになる。しかし、結果として2名のチームも存在している。

そこで、欠席したものはクリアーして、とにかくA組から3名、B組から3名を整理番号順にディベーターとして、指名した。したがって、ディベーターは、前もって予定していた学生とは異なることがある、というより異なる可能性が高いということになる。

実際には、A組のディベーターの消化率が高く、B組の消化率が低かったため、最終的には、B組の中から賛成派と反対派双方を指名することとなった。万が一、不足とかオーバーした場合は、ディベーターとして高評価を受けた学生を指名することも考えていたが、そこまでは必要なかった。

以上、チーム作りとディベート運営の苦心談である。

最後にディベート後に命題に対する判定をレポートとして作成させた。この時点では、賛成派、反対派、いずれも、自分の考えで判定しなおしてよいこととした。

ここで考えたのが「一人ディベート」という方式である。資料2から際掲する。

- ① 判定（「賛成」か「反対」かのみ記す）
- ② 賛成（反対）の立場
- ③ 反対（賛成）の立場
※判定が「賛成」の場合→②反対③賛成
※判定が「反対」の場合→②賛成③反対
- ④ 結論にいたる理由（②の意見と③の意見を比較し、それによって「賛成した」（もしくは「反対した」と記す）、と論ずること。つまり4段落になる。①は漢字2字のみ、②と③が長く、④は以上を受け、簡潔に結論を記す。（資料2 抜粋）

この形式で書かない場合は大きく減点することとした。つまりディベートの理解を、レポートを作成することにより、深め、形式を実感し、確実に把握させようと試みたのである。

- ① は、「賛成」か「反対」かしかない。だから漢字2字とした。それでも「中間」とか、「賛成です」とか書くものがある。客観性を持たせるのは大変である。
- ② は、①と④は同じ判定になるわけだが、①が賛成の場合、②は反対となり、③が賛成となる。もしも①が反対なら、②が賛成で、③が反対となるわけである。これは一方的な「賛成だから賛成」とか「反対だから反対」という非論理性を排除するために行った。ただし、④の結論に近い③に結論と同じ判定がくるのは当然で、それは学生たちも納得済み。ただし、②は③よりも分量は少なくなくてはいけない、と注意した。基本的に②が長いのなら、そちらに重きがあると考えるのが普通だからである。
- ③ は②で述べたように、③には④の結論と同じ考えがくる。そして分量は②よりも多い。この②は③よりも分量が「少ない」というのはどこからくるかという点、ディベーターたちの根拠で、納得させられるものの分量ということである。したがって③のほうが当然、多くなるというわけである。

この②と③ではディベーターの具体的な氏名と発言を記させるようにした。誰と誰とのどういう発言に賛成したのか、を明確にさせるということである。

- ④ は結論だが、簡潔にとはいっても①の判定とは異なるので、一番、誰の、どういう発言が決

め手になったかを記すように指導した。

5、まとめ

女子大生にディベートを教えるのは難しいと思う。差別して言うのではないが、男性のようにゲームに興じるという姿勢にはなかなかないというのが、その原因になっていると思う。反対意見を出すのが、やはりはばかれるという雰囲気が終始存在したように思える。

それをふまえ、本科目「ディベート演習」を行うにあたって、留意した点をまとめておく。

- 1、テキストの徹底理解
- 2、教師との発言の双方向性
- 3、授業前レポート作成
- 4、ディベーターの役割確認
- 5、聞き手側の感想（発言）
- 6、授業後レポート作成（内容と判定と反省）

以上である。

1については、ディベートの基本姿勢から役割、そして目標とする点を常に意識させるように、毎回、授業の冒頭でテキストを用いて理解を徹底させるようにした。「演習」ではあるが、このわずかな「講義」が生きてくると思う。相手が敵で、敵に戦いを挑み勝つことが目的ではないことを常に頭におかせるように配慮した。

2については、ディベートには限らないのだが、学生の言いたいことはどんな些細なことでも言わせるようにした。授業中での発言になれるようにしむけたのである。したがって、「そんなバカな考え」などとは絶対に言わない。これは全科目について言えることで、教師の留意する点だと考える。だからコミュニケーションがとれているという安心感は学生側にも教師側にもあったと信じている。

3については、宿題をベースに、当該の命題についての考えを自由に書かせた。自分の考えをまず確認することが大事だからだ。宿題が功を奏し、この自由作文はなかなかうまく書けていたと思う。

4については、各3名の役割を確認させ、それに応じてディベートを行った。具体的には、判定とその理由を述べる学生からスタートし、以下その判定に対する見解を述べ、自己の主張でまとめる流れとした。各自起立し、マイクを持ち、指名を名乗ってから発言させるようにした。回を追うごとに発言が具体的に根拠のある、しっかりしたものとなっていった。各学生、みなディベートに進歩のあとが見られた。

5については、ディベーター6名以外を聞き手とし、全員に毎回一度ずつ発言させた。これはディベートを注意深く聞かせるためと、ディベートに参加している気持ちを強く持たせるためである。なかなかよい意見が述べられるようになっていった。

6については、前章で記したように「一人ディベート」である。これはなかなか名案だったと思う。これも回を重ねるごとに、しっかりとしたもの、つまり具体性・客観性をもった判定となっていったのである。

ここで、学生の定期試験に小論文として提出させた「一人ディベート」を参考までに掲げておく。ことわっておくが、優秀作品ではなく、手元にあるレポートの一つを無作為にとりあげたものである。なお、ディベーターがいないので、まったくの「一人ディベート」となっている。

★命題「選挙権の年齢を18歳まで引き下げるべし」

①賛成

- ②18歳という年齢はまだ大学生の人も大半だし、遊び半分の気持ちで投票してしまう場合もある。成人年齢が20歳なのだから、選挙権も成人という目安で決めたほうがいい。
- ③しかし、18歳でも立派に働いている人もたくさんいる。18歳という年齢は結婚もできるし、車にも乗れるし、自らのことが、考えられる年齢でもある。将来の日本を担うのは今の若者である。少子高齢化が進む今、「大人」への自覚を早くから持たせるべきである。選挙や政治のことに関してはある程度中学校の頃から学んでいるので、そういった知識も活かすことができる。税金を納められる年齢ならば、20歳未満でも選挙権は与えるべきである。
- ④以上のことから、自己判断能力のある年齢に達していると思うので、選挙権の年齢を18歳まで引き下げることに賛成だ。

③に「しかし」といれることで強調姿勢を訴えるようにした。これが「一人ディベート」の重要な用語となった。

なお、ディベート演習に限らず、全授業で表レポートの最後に「本日の目標」、裏レポートの最後に「本日の目標の達成度」を記させている。授業に能動的に参加させるための切り口となるものとして、今後も継続していくつもりです。

以上「ディベート演習」について、覚書としてまとめてみた。本稿をベースに、今後も本科目のよりよい運営を目指していきたいと考えている。